岡山県笠岡市高島白石島ツアー（2005.02.26～27）報告

１．事務局報告：高橋政和

２．参加者の声

高島イワクラ配置略図（薮田徳蔵氏提供）

1	天津磐境	9	萬子石
2	高島行宮跡	10	岩戸石
3	東磐座	11	
4	亀岩など	12	古墳
5	南磐座	13	親子亀岩
6	明治天皇招魂碑	14	天目岩
7	踊り石	15	子妊岩
8	どんび石		

白石島イワクラ関係略図（天野正氏提供）

高島白石島ツアー報告

高橋　政和

去る二〇〇五年二月二十六、二十七日にイワクラ（磐座）学会主催の岡山県高島白石島イワクラツアーに参加した。その客観的な顛末と、主観的な随想を記す。

出発

二月二十六日。十二時二十分に笠岡港に集合。参加者総数は二十六名。遅れて参加された方もおられるので、この時点では二十四名。

当日の資料を配布し、船に乗る。まだ知らない顔同士の参加者が多いためか、皆船内では緊張しているように見えた。船舶の機関音が響く中、副会長鈴木旭氏の次回作の構想などを伺いつつ、一路高島へ。

子妊石

港に降りてすぐに高島在住の学会会員薮田徳蔵氏と合流。待合所で高島に存在するイワクラ群の簡単な説明を受ける。

気もそぞろに一同、最初のイワクラ『子妊石』へと向かう。徒歩十分ほど。途上にも様々なイワクラが存在した。その多くは地図に記されていない。腰を据えてゆっくりと調べたい所。

吹雪の中のイワクラ訪問となる。

写真：子妊石

参加者は思い思いの場所に散り、子妊石とその周囲の地形や他のイワクラとの配置について語った。子妊石の手前には明確な石切りの跡があり、現在は広場となっているのだが、その石切り場を含んだ相当に広いゾーンが、全体で一つの巨大イワクラとなっていたのではないか、という話が印象に残った。破壊の後に雑木が群生し、想像力の無い人間には昔の情景がうまく浮かび上がらない。

国内でも最大級の女陰石と名高い子妊石だが、その造形は上に登って見た方がよりわかりやすい。

細部はともかくとして、海辺に存在する多くの岩石と同様に子妊石は波の侵食を受けてその奇観が形成された巨石だと思う。しかしだとすれば、やはりこの海から離れた高台に子妊石がぽつんと存在するその理由に説明がつかない。誰か万人の納得しうる明確な説明をしてくれないものだろうか。

写真：踊り岩

付近の『孫姫石』、『達磨岩』、『亀石』、『きのこ石』などの見た目のイメージと名前が結びつきやすいイワクラ群を眺めながら、一行は次に高島の中心部に当たる王久山遺跡へと向かった。

王久山遺跡

『王久山遺跡』は王久山山頂の『天津磐境』や『踊り岩』などのイワクラ群の総称である。ここでは実際に旧石器時代から平安時代にかけての様々な出土

イワクラ学会会報

物が見られ、考古学的にも既にその価値を認められている。
　海から離れ山中に入ると、植生が南国調に変わる。何となく別世界に迷い込んだようで面白い。吹雪もいつの間にかやんでいた。
　王久山を訪れた一行はまず『萬子岩』と『どんび岩』に向かったのだが、ここで私は進路を外れる旨を告げ、集団から離れたのでそこで何が起こったかを知らない。遊撃の理由は『岩戸石』を見に行くためだ。岩戸石は遊歩道からも離れており、完全に藪の中にある。少々危険。五分ほど一人で道なき道を行き、そしてそれを発見した。
　高さ四～五メートルの堂々たる姿。周囲はおよそ二十メートル以上はあるだろう。子妊石より巨大というのも頷ける。巨大な台石の上に、更に巨大な直方体の巨岩が乗っている。苔むした巨大な平面が、岩戸の名の由来だと思われ、後方に回ると全体が真っ二つに裂けていることが見て取れる。
　山の中腹にある『踊り岩』で本隊と合流する。
　『踊り岩』は巨大な平面を上部に持ち、横から見ると亀の姿のようにも見える。昔からこの上で、神にささげる踊りを踊ったという言い伝えが残る。一枚の写真に収める事が難しいくらいに大きい。参加者も皆苦戦していた。
　薮田さん曰く、この辺りに存在するイワクラのほとんどは、比較的最近命名されたものだが、この『踊り岩』と『岩戸石』は古くからその名で呼ばれていると言うことだ。両者それぞれの位置からは藪に視界を阻まれて、今はお互いの姿を確認できないが、距離的には実はそう遠く離れていない。
　漠然とであるが、私はこの両者はセットで天岩戸神話を再現する祭祀遺跡だったのではないか、と考えた。すなわち岩戸に閉じこもった天照大神を誘い出すための、アメノウズメの踊りを再現する舞台装置としての役割である。
　記紀の成立は八世紀初頭であり、それまで古代日本神話の原型は、稗田阿礼に代表される超人的な記憶力保持者の口伝により伝えられたものとされているが、記紀成立以前、神話を伝えたのは果たして本当に口伝だけであったろうか。イワクラに代表される神話の再現施設を利用した可能性も十分にあり、その代表例がこの高島に現存しているのではないか。
　仮にこの二つ、あるいは高島に存在するそれ以上の数のイワクラが、日本神話の原型となった物語を伝えるための記憶装置であったと証明できるならば、帰納的にここ高島は、文字とし

写真：岩戸石

イワクラ学会会報

て成立する以前の神話を伝える地、やはり神武天皇行幸地であったと言えるのではないか。それを『高島宮』と呼ぶかどうかはまた一つ上の次元の話となるが。

天津磐境

山頂の環状列石『天津磐境』に向かった。

ここは高島のほぼ中心に位置し、高台にあるため四方を見回すのに絶好の場所である。ほぼ真西に、先ほど訪れた子妊石が小さく見えている。

瀬戸内海がよく見える。薮田氏の話によると、この辺りは紀伊水道と豊後水道の合流点に当たり、潮の流れが比較的ゆるやかであるらしい。逆に言えば、ここから船出するには東西どちらに向かうにせよ、潮の流れに逆らうことになる。船舶の係留地にはここ高島はもってこいの場所なのであろう。古代の大船団が同じように考えたかどうかはわからない。ただある船団が、三年ないしは八年、一所に留まる理由の一端にはなりそうである。多くの人材が集いやすい場所であるようにも思える。

興代館

進路としては最初に訪れた港に一旦戻り、今度は北進することになる。このコースの主眼は興代（おきよ）館と呼ばれる高島の歴史を紹介する博物館である。だが途上に無視できないイワクラが次々と出現する。幾つかを記す。

防波堤のすぐ脇に鎮座する『御亀大明神』。その名の通り海の守り神であるとのこと。位置関係として海からこのイワクラを拝む形式となる。偶然か意図的なものかは知らないが、その裏側に恐らく高島住民のものと思われる古びた霊園がひっそりとあり、無意識のうちに彼らの霊を慰撫する事ともなっていた。

『明治天皇招魂碑』なる大石碑が現れた。これは高さ三メートル程の立石の側面を削り取って、そこに改めて文字を刻んである。剥ぎ取られた表面は未だ白く、生々しい痛みを感じる。

写真：明治天皇招魂碑

岩石や山岳などの自然信仰の衰退、人格神の誕生、仏教の国教化、神仏混交や廃仏毀釈、皇国史観など、宗教史における時代の節目ごとの旋風は、確実にイワクラにも影響を及ぼしている。その一つ一つの事の正否は私には分からないし、白黒をはっきりとつける気も無い。ただ、その旋風の跡の残るイワクラは現存し、傷ついて尚数千年の間、こうして残り続けるのだろうと思う。

余談だが、高島には大正八年に建てられた『高島行宮遺阯碑』なる石碑もある。自然石を利用したものとしては国内最大級のものとの事だ。

興代館では島内の遺跡から出土した土器や貝殻装飾品、古地図や新聞記事などが展示されていた。その物量と質には驚いた。

イワクラ学会会報

興代館の外の小さな広場では、薮田さんらが中心となって作成中の、高島の詳細なジオラマが展示されていた。見事なできばえであり、完成が心待ちにされる。今回の特集の表紙はそのジオラマの近接写真である。

さて耳慣れない興代なる人名であるが薮田さん曰く、この女性はかつてこの高島で、神武天皇の妻であった人物であるとの事。記紀にその名は見えず、実在したとするならば、歴史上からは抹殺された人物となる。この名がどこに記録されているか、どのような伝承が残っているのかは残念ながら聞き取れていない。

高島を去る

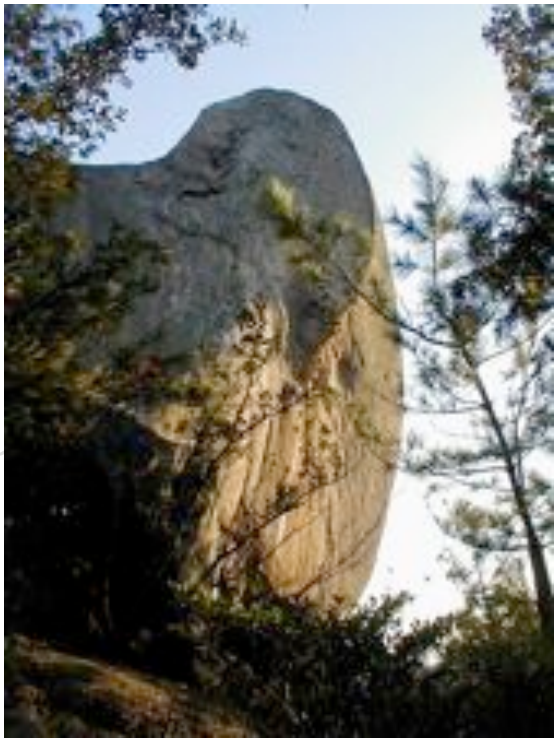
十五時四十六分の船に乗るため港に向かう。

船を待つ間、改めて高島の地図を眺めた。王泊や興太郎といった何やら曰くありげな地名が興味をそそる。

薮田さんから高島名産の味海苔が渡された。これは解散時に参加者全員に分配させていただいた。恐ろしく美味であるので、機会があればご賞味いただきたい。今回のツアー参加者の間でも大評判であった。

船に乗り薮田さんに別れを告げ、白石島へ向かう。

子妊石は高島のほぼ西端にあり、海上からもその姿を容易に捉えることができる。岬の突端に一人立つようなその姿は、高島のシンボルの面目躍如と言った所である。



写真：皇国岩

白石島

十五時五十五分、白石島に到着。港で白石島公民館館長の天野正氏と合流する。港のそばに待合所があり、その左側に大きな岩が見える。白石島の玄関役のイワクラだ。この巨石の左下の辺りに不動明王が刻まれており、古くは波切不動として海難除けの守り神とされたと通りがかりの住民が教えて下さった。

皇国岩

入り江となった港の反対側の陸地に小高い山が見えている。その中腹から巨大な立岩が飛び出ており、夕陽を受けて赤く輝いている。これが『皇国岩』で、我々はまずそこに向かった。

登山口にある社で天野氏の説明を伺ってから、社の裏を抜けて『皇国岩』へ。低い山であるが急斜面である。藪の中をかきわけ進むと、突如目の前に巨大な皇国岩が見える。幾つかに分断された巨石の幾つかを台座にして、その上に更に巨大な超巨石が乗っている。遠目には巨大な勾玉のようにも見える。裏側に回ると、主石部分は大きく二つに分断されVの字形になっている事がわかる。

皇国岩の割れ目から、西を望むと遥か彼方の洋上に小島が見えた。頂上に丸い巨石を配している。この島には頂の巨石が過去、光り輝いたという伝承がある。全体で『明石小山』と名づけられ、現在は単に小山と呼ば

写真：皇国岩の割れ目から小山

れている。この小山は白石島のさまざまな場所から見えるが、ここ御国岩の巨大な隙間から西方を眺めるのが本来の遥拝方法ではないかと思う。

この小山、干潮時には白石島本島と砂州でつながり、歩いて渡る事が可能らしい。次の機会には是非行ってみたいものである。

昭和十八年に編まれた『岡山県小田郡白石島名勝遺跡帳（以下「白石島遺跡帳」）』によれば

この皇国岩には、高皇産霊尊（タカミムスビノミコト）の御神霊が宿るとのこと。別名に『御国岩』『びくにいし』など。

皇国岩は天を支えるほどの巨大な岩の柱が目立つが、周囲の茂みの中にも何やら怪しい巨石群が多く存在する。『白石島遺跡帳』にも、この辺りは巨石を中心とした磐境である、と記されていた。一行はしばらく、思い思いの場所で巨石探索に興じる事となった。私自身は、畔蒜一美氏（今回関東からの参加）が次々と曰くありげな岩を発見するのが面白くて後をついて歩いていた。

白石島八十八ヶ所

皇国岩の登り口まで降り、来た道からは大きく外れ、迂回しながら港まで戻る進路をとる。山道の途上に幾つかの巨石、多くは立石が現れる。中でも最も異質なのがこちら。

写真：八十八ヶ所札所の一つ

岩質の異なるアプライトが、巨大な花崗岩の表面をぐるりと取り囲み、異形の様相を呈している。誰かが人面岩だと叫んでいた。私には象の姿に見えた。

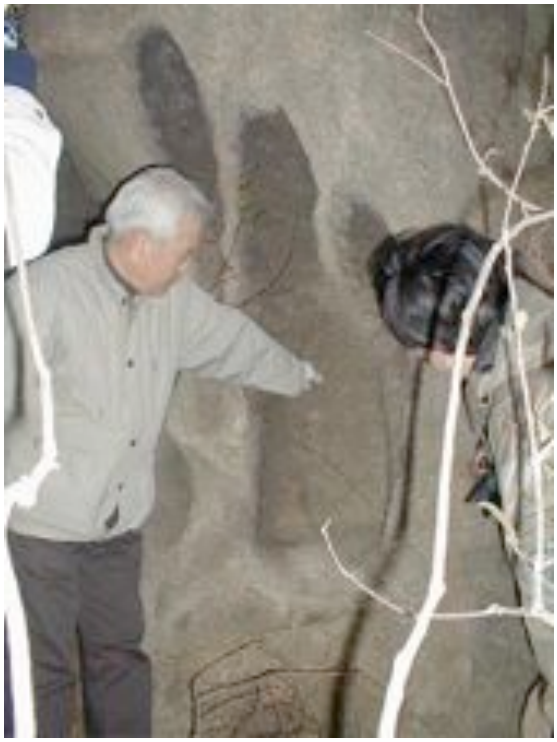
白石島には、イワクラを仏教的祭祀対象とする白石島八十八ヶ所なる札所が存在する。ここもその一つ。多くは無名のイワクラだが、そのどれもがバリエーションに富んだ、個性的な姿をしている。

イワクラ学会会報

富山

日暮れも近いが、更に白石島北西端に当たる富山に向かう。無名のイワクラ群が多数存在。奇妙なえぐれ方をした岩が多く、そのえぐれ方が人為的なものかどうかは分からないが、かつてそこに仏像が安置されていた事もあるらしい。

富山の地名の由来だが、金鶏伝説のある白石島から、元は鳥見山と言ったらしい。同様の起源を持つ地に、奈良県奈良市の富雄や、桜井市の等彌神社（鳥見山を御神体とする神社）がある。いずれも神武天皇の金鶏伝説に由来する。



写真：富山にて

懇親会

天野氏から行政や自治体が発行する笠岡諸島、白石島のパンフレットが多数、参加者全員に配布された。その後、天野氏による白石島のイワクラ群のスライドショーが行われた。

乾杯をして懇親会開始。宴の途中で一人一人の自己紹介が行われる。大河内俊光氏による五十年ぶりの奇縁の話など、人の縁の不思議に驚く事しきり。酒の力もあってか全員がよく喋り、楽しく交流することができた。

十一時頃に懇親会は散会。

白石島について

白石島の名の由来は、白石港の北七〇〇メートルの洋上に浮かぶ『沖の白石』に由来するというのが現在一般的に知られる通説。

一方、白く光り輝く巨石群の伝承が、地名の由来となったとする説もある（『白石島遺跡帳』など）。

その伝承とは天岩戸伝説に関わるものらしい。ただ妙な事に伝承が残るイワクラのどれもが、岩窟や岩穴、或いは岩戸の形状を伴っていない。立石、丸石、或いは積み石なのである。

実例を挙げると、島の北西端にある『明石小山』『トンビ石』、『とび石』などである（残念ながら今回のツアーでは『明石小山』が遠目に観測されたくらいで、時間とコースの都合上、全てがパスされている）。

それぞれ『トンビ石』は光り輝くトビが止まったイワクラ、『明石小山』はその光に照らし出される事により、天照大神の神霊が宿っているとされた巨大な丸石、『とび石』はその時光ったとびの石化したもの、と言われている。そしてそのトビはそもそも、天岩戸から天照大神がお出ましになった瑞相の象徴であるとの事。

寡聞にして『沖の白石』にまつわる逸話を知らないのだが、地名の由来としては後者のイワクラ群が形成した光の伝説の方が相応しいものと思われる。

現在でもこの白石島の小中学校の校章はそれぞれ金の鳶（とび）を象ったものである。

イワクラ学会会報

二日目

一人だけ二日酔いの状態で起床。ご迷惑をおかけしてすいません。

客室の窓からは白石島の北側の海が見え、少し西に全山岩の弁天島が見える。赤い鳥居が島の端に立ち、おそらくは厳島の神を祀っているのではないかと類推された。朝食を摂り、八時半に出立。

開龍寺

古い町並みを抜け、真言宗開龍寺へ向かう。途中、稲荷神社や三宝荒神などの磐座を御神体としていると思しき社を参拝。これらは全て開龍寺の敷地内に存在するものだが、神仏習合の影響が色濃く残っている事を示している。

途中、無名だが明らかに祀られている磐座を発見。その右隣の同じくらいの大きさの巨石は、何とタンクとして使用されている。鈴木旭氏の指摘によると、これは両者セットで陰陽石であり、柵の囲い方が間違っているとの事。

『市郎兵衛の力石』なる立石が現れる。およそ八〇〇キロほどもあるらしい。弘法大師信仰にまつわる民話が残る。

力石のすぐ横に、更に巨大な立岩『不動岩』がある。下部に人頭大の窪みがあり、そこに額を押し付けて願い事をすると叶うという。巨大な岩は夏でも冷たく、頭を冷やすのに最適だろうと皆話した。

大師堂

開龍寺の本堂に当たる大師堂。屋根に巨大な岩が覆いかぶさっている。その様式は白石島の中心に位置する寺に相応しい。

堂が立てられる以前、弘法大師がこの白石島に立ち寄った際、この大石の下で三十七日間修行したとの事。帰り際に自らの像を彫って去ったと伝えられる。

この開龍寺の裏側にうがたれた穴からは、『大師の霊水』なる清水が常時湧いている。

イワクラ学会会報

写真：大師堂前にて

真名井

大師堂から参道を伝って山を降りる途上にある『真名井』と呼ばれる巨石がある。巨石の下に隙間があり、そこに常時水が湛えられ、名の由来となっている。隙間から中を覗き込むと天井には女陰が刻まれているという。早速何人かの男性陣が我先にと覗き込む。

『白石島遺跡帳』によれば、この真名井から湧き出る水は、付近の『磐鏡神社』に献上される清水であったとの事。巨岩から湧き出す水に付き物の、弘法大師伝説もこの真名井には残されている。

磐鏡

ここで嬉しい大誤算があった。

二〇〇四年十一月の事前調査における必死の大捜索でも見つからなかった『磐鏡』が今回のツアー中に六十年ぶりに木立の中で発見されたのだ。五十年前の写真と現在の写真を併せて載せておく。五十年前と同じアングルで写真を撮ろうとした場合、現在は木立に覆われてしまい全くその姿が見えない。

写真：磐鏡

見事な平面を持つことが分かると思う。個人的には国内に存在する幾百の鏡石の中でも最も美しい姿を保っているものではないかと思う。

白石島のほぼ中心にそびえ立つ白い巨塔、仏舎利塔に隠されるように磐鏡は存在する。

磐鏡の名は『白石島遺跡帳』によれば、神日本磐余彦尊（カムヤマトノイワレヒコノミコト）の時代にまでさかのぼる太古の昔からの尊称との事。『眞名井』の記事でも触れたが、『白石島遺跡帳』の記述からはこの磐鏡を御神体とする『磐鏡神社』なる社の存在が類推されるが、詳細は不明。

白石島巨大イワクラルートへ

白石島にはおよそ数え切れないほどのイワクラが存在するが、中でも最も重要なイワクラを挙

げろ、と言われれば、それは島の真ん中に位置する三つの山頂それぞれに存在する巨大イワクラ、『鬼ヶ城』、『なべかろう』、『王玉岩』になるのではないか。島のほとんどの場所から視界に入る、これら三つのイワクラこそが島内に存在するほとんど、或いは全てのイワクラに影響を及ぼす起点となっているのではないかとまで思われる。

　このうち『鬼ヶ城』は「巨石を積み上げて人為的に作られた岩山ピラミッドではないのか」という指摘は既に会報第二号において、会長渡辺豊和、常務理事柳原輝明両氏により為されている。また、国指定天然記念物として名高い『鎧岩』も鬼ヶ城の中腹部にある。あたかもピラミッドの形を整える葺き石であるかのように。

　その三つのイワクラにいよいよ向かう。何せこの二日の間、ここに来るまでにもどこからでも見えていたのだ。皆の期待感も大きい。

　鬼ヶ城に登り始める途上、幾つかの赤い古びた鳥居の間をくぐることになる。途中設けられていた祭壇で、付近の住民であろう老夫婦が熱心にお祈りをしていた。内容は天照大神を称える伊勢神宮系列の祝詞と思われた。

神明大権現

　一行は山頂に向かう前に少しコースを外れて『神明大権現』なる岩窟へと向かった。これは山の中腹にぽっかりと空いた岩穴をご神体とみなし、鳥居を設けて社としている場所。戦後まもなくの頃までは、盲目の老婆が毎日この岩窟の入り口で守番をしていたそうだが、今はもう誰もいない。岩窟の入り口は大人ならば這わねば入ることができない程に狭いが、三～四メートルほど進むと突き当たり、そこではなんと立ち上がることもできる。天野さんの談によれば、この岩窟には「明治の頃までは這いながら山の裏側にまで抜けられた」という奇妙な逸話も残っている。岩窟奥の左手に山の裏側に抜けることが可能であったと思しき件の大穴が空いているはずであるが、現在はその穴はコンクリートで塞がれており、その上に安置された稲荷社が暗闇の中で静かにたたずんでいる。社の上にも延々と穴は続いているが、猿でもない限りは登ることは不可能だろう。

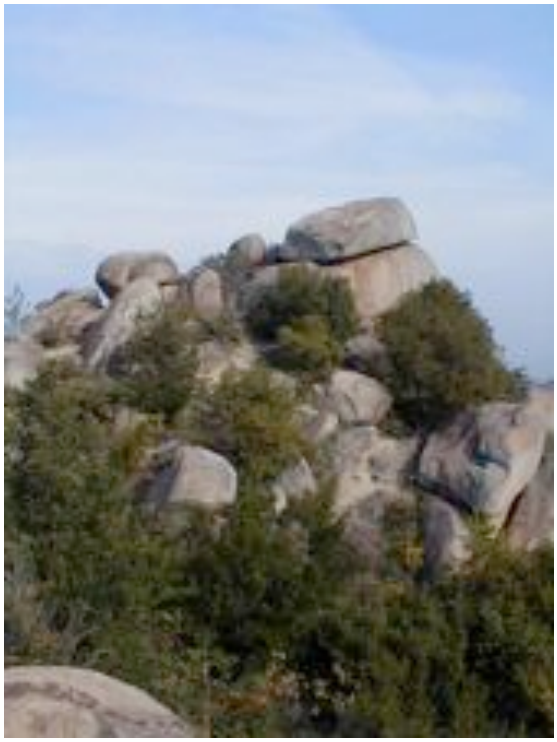
写真：神明大権現の岩窟

　この岩窟。風水人あるいは溶岩、いずれかの手により一枚岩が彫りぬかれてできたものではない。巨大な岩を両脇から支えるようにやや小ぶりな岩が見える。奥も同様に、主石以外の岩により支えられている。幾つかの巨石が積み重なり、その隙間が岩窟となっているのだ。

鎧岩

　鬼ヶ城の山頂の程近くに、国指定天然記念物の『鎧岩』がある。アプライトの岩脈が全山花崗岩の鬼ヶ城の北東の斜面を覆

っており、その様が鎧の直垂の



写真：鬼ヶ城山頂部

囲むようにアプライトの岩脈が張り付いているように見える。たまたまそのうち、人目につきやすい位置にあるアプライトが鎧岩と呼ばれている。

ように見えた事から鎧岩の名を持つ。会報第二号において、ピラミッドの葺き石ではないかと指摘されているのはこの岩のことだ。

ちなみに鬼ヶ城におけるアプライト岩脈は、この鎧岩以外にも、山の東側斜面にも存在する。その角度は人の到底通えぬほどに急だ。言い方を変えれば、鬼ヶ城の山頂部分をぐるりと取り

鬼ヶ城

見事な威容。渡辺、柳原両氏により指摘されている通り、ここはまさしく人工の岩山ピラミッドなのではないか、とまで思わされる。ただし鈴木旭氏によれば、この山頂部は既に破壊の跡が見られるとの事。

ところでそもそもこの日本にピラミッドなる文明が過去、果たして本当に存在したのか。超古代文明研究家の間では常識なのかもしれないが、つい先日までこういう事に全く興味が無かった私には、にわかに信じがたい。

しかしここでふと、あることを思い出す。

鬼ヶ城の山麓に、神明大権現が存在することは既に述べた。ここで神明という名は、『明るい神』の名が示すとおり、全国的に太陽神、すなわち天照大神（あるいは別名オオヒルメノミコト）を祀る社に冠されている名前である。ここ白石島の神明大権現も他聞に漏れず天照大神を祀る社であることは想像だに難くない。すぐ直下の祭壇で天照大神を称える祝詞が唱えられていた事は既に述べた。

元々エジプトのピラミッドとは神霊としての王の魂を太陽神と見なして、その力を永遠に再生させるために造りだしたものではなかったか。そのエジプトのピラミッドにも、夜明けと共に飛翔する鷹の化身となった太陽神ラーのみが入ることができる『空洞』が設けられている事は著名な事実である。

奇妙な符合を感じる。

ここで更に、太陽神としての天照大神を祀る（＝封じる？）岩窟から、一つの話を連想した。言うまでも無くそれは、古代日本神話における天岩戸伝説である。

国内に存在するイワクラ群をデータベース化したものから『天岩戸』の名、あるいは伝説を持つイワクラ群を、その存在する地名と共にリストアップすると表１（次ページ）のようになる。

母体数が二〇〇〇件程度の貧弱なデータから抽出しているため、一覧から漏れている可能性は高い。更に、無作為に抽出しているため、後世の創作など、

或いはこの場では「ノイズ」と言えるものも当然入っていることとは思うが、改めて眺めてみてどうだろうか。見覚えのある地名や気になる地名のある方もおられるのではないか。

ピラミッドの定義が、「太陽祭祀のために造形された神南備型の山や石造物」を指すのであれば（これはエジプトのピラミッドにも通じる定義となる）、ここ日本においてもピラミッドと呼べる山、或いは巨大石造物は確かに存在すると思う。あえてそれにこの場のみのセンセーショナルなタイトルを冠するならば、『ピラミッド天岩戸神話起源説』とでもなるであろうか。

私はこの『ピラミッド天岩戸起源説』の見地から、この鬼ヶ城はピラミッドであるという指摘に対し、ささやかながら賛意を示しておきたい。鬼ヶ城、一見の価値あり、である。

名称	所在地
天岩戸	岩手県釜石市五葉山
天岩戸	福島県安達郡岩角寺
天の岩屋戸	長野県長野市皆神山
天の岩戸	岐阜県大野郡位山
天の岩戸	岐阜県山岡町イワクラの森
石戸神殿	岐阜県山岡町石戸神殿巨石群
重ね岩	岐阜県和良村戸隠神社
–	静岡県周智郡森町奥磐戸神社
天岩戸	三重県志摩郡恵理原
天岩戸	大阪府交野市盤船神社
神輿岩	京都府北区小野中ノ町岩戸社
御座石	京都府加佐郡日室ヶ嶽天岩戸神社
天の岩戸	京都府山科区日ノ岡夷谷町日向大神宮
–	滋賀県蒲生郡安土町岩戸山神明神社
岩戸	滋賀県高島市白鬚神社
天岩戸	奈良県宇陀郡室生村龍穴神社
–	奈良県橿原市香久山天岩戸神社
立盤神社	奈良県奈良市大柳生町夜支布山口神社摂社
後立盤	奈良県奈良市柳生町天乃石立神社
前伏盤	奈良県奈良市柳生町天乃石立神社
前立盤	奈良県奈良市柳生町天乃石立神社
烏帽子岩	島根県浜田市大祭天石門彦神社
天の岩戸	岡山県真庭郡川上村茅部神社岩倉山
産子の岩戸	広島県西条町比婆山
–	徳島県佐那河内村天岩戸別神社
天の岩戸	徳島県美馬郡一宇村天磐戸神社
天の岩戸	佐賀県大和町巨石パーク
天の岩戸	宮崎県西臼杵郡高千穂町天岩戸神社

表１：「天岩戸」の名称、或いは伝説を持つイワクラの一覧

鎮懐石

鬼ヶ城から少し進路を外れて一行は笠越と呼ばれる古道に寄り道をした。ここには『鴨別命の鎮懐石』と呼ばれるイワクラがある。

高さ一メートル半ほどの大きさで、土台となる石の上に、笠の形をした石が積まれたような姿をしている。

鴨別命は書紀では温羅退治で有名な吉備津彦の三男とされる。後の豪族、吉備氏の祖と言われ、神功皇后、應神天皇の節にその名が見える。岡山市の吉備津神社を建立した人物と言われ、熊襲討伐の功により笠臣の姓を賜り、これが笠岡の地名の由来となったと言われる。

また『白石島遺跡帳』によれば、命は白石島の国使で白石の祖先に当たり、子々孫々八代に渡るまで、仲哀、神功、應神の遺跡における祭事を執り行なったとの事。鴨別命の子孫は代々小笠と呼ばれた。

『鎮懐石』の名は「懐妊を鎮める石」という意味で、記紀伝承に言うところの神功皇后の新羅征伐の折、腹に巻いた石の呪力で出産の時期を遅らし、征伐後に出産したという逸話に由来すると思われる。この名を持つイワクラは西日本、特に九州地方に幾つか見られるが、ここ白石島の鎮懐石は大人の背丈ほどもあり腹に巻くにはやや大きすぎる為、鴨別命と神功皇后との関連から連想した名称であると思われる。

ちなみに二〇〇四年十一月の事前調査の際、兵庫県立大学の地球テクトニクス研究室の森永速男助教授は、「この鎮懐石は地質学的に自然にできたものとする説明をつけられないように思う」と述べておられた。

この鎮懐石を越えて更に南下すると、次の山頂には立磐神社の跡地があるとの事だが、時間が無いので遠目に眺めここで引き返す。

この立磐神社の御神体であった立岩は、かつて石工により打ち倒されたとの事。もっともその石工も「神罰を得て死」んだそうだが……(「」内は『白石島遺跡帳』より引用)。

イワクラ学会会報

写真：なべかろう

なべかろう

まるで一斤のパンを山頂にそのまま並べたかのような奇妙な姿を持つ巨石、なべかろう。鬼ヶ城から大玉岩への途上にある。

三つの巨石のそれぞれの頂からは、お互いの姿が一望できる。ただ周囲を深い藪に覆われたこのなべかろうに登るのは至難の業だ。

『白石島遺跡帳』によれば『鍋下爐』あるいは『唐人竈』の名を持つ、との事だが現在は単になべかろうと呼ばれている。鍋や竈など、食に通じる名を持つイワクラであるが、この巨石の上では、かつて神に捧げる犠牲となる鳥獣を兵士達が食らう祭事が行われていたとの事。現代人の感覚においては残酷な印象をも受けるが、口伝によればその祭事は明るく楽しい雰囲気で行われたと言われる。

このなべかろうの上で捧げられた鳥獣を飼育する聖域が白石島南東部に存在し、そこは「遮丸」と呼ばれていた。現在においても地名に残る。「遮」が「鳥獣を山谷に遮り交える」意で、「丸」は「鳥獣を丸の内に飼育をし」た場所との意で、これは全国的に見ても珍しい例らしい。

なお、高島の「神籬前畠」より発掘される土器の中に、鹿のあご骨が出るのはこの祭事のゆえであると言われ、これは高島と白石島が考古学的に結びついた一つの例であり、興味深い。

って北東方面を眺めると、いやでもこの山が目に入る。

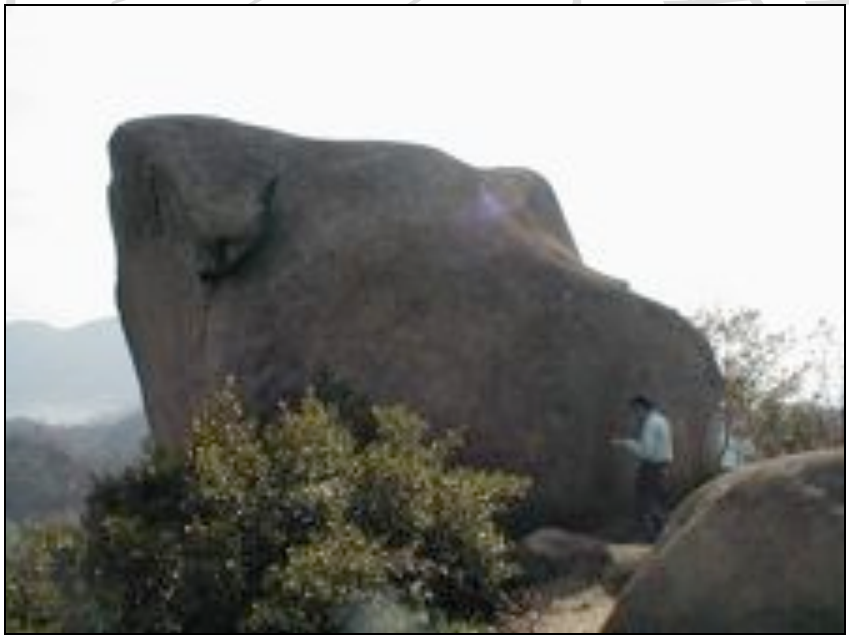
ここでしばし休憩をとった。

王玉岩

一際目立つ丸い巨石が次の山頂に控えているのが、遠目にもよくわかる。『王玉岩』である。現地の看板では『大玉岩』となっていた。

鬼ヶ城、王玉岩近辺は共に良い展望が開けている。北東方向、瀬戸内海を越えた本州の先。鼻のように突き出た半島の上にそびえる三角山が見える。ここに来るまでにも参加者の多くが、「この白石島のイワクラ群の多くが北東方向を意識した向きや割れ目、紋様を持っている」と指摘していた。その北東方向にあるものは何だと話題になっていたが、それが件の三角山であった。白石島で手ごろな山に登

イワクラ学会会報



写真：王玉岩

高山展望台

王玉岩から更に北上し、次の山に登る。山頂が『高山展望台』となっており、白石島全景のみならず、瀬戸内海を越えて東西に広く本州までよく見える。

これを書きながら地図と照合した上での推測だが、この山の名は応神山。

再び話題は瀬戸内海をはさんだ対岸に見える秀麗な三角山に移った。ここに設置されていた地図から、なべかろうや王玉岩、鬼ヶ城から見てほぼ北東方向に位置するこの山の名称は青佐山であることが判明した。

光り輝くイワクラがその地名由来となった白石島。焦点をどこに取るかにもよるのだが、その白石島の主要なイワクラ群から、この青佐山に向け複数の線を引き、更に延ばす。いずれの線上においても青佐山を越えた先には、金光教で有名な金光町が広がっていることは記しておいても特に損はないだろう。実際にどのラインこそが主要幹線として採用されるべきかはわからない。興味のある方は地図で確認して欲しい。

ちなみに高島にも「金光米子」なる地名が存在する。

中峰から

ぐるりと大きくハイキングコースを周遊し、ハト岩を見るために中峰と呼ばれる場所に向かう。カッパドキアか或いは畳ヶ浦かといった奇観の岩場を通り抜け、休憩所で一休み。南の方角に鬼ヶ城が綺麗に見える。王玉岩の辺りまでは、ハイキングコースを歩いていても気がつかなかったが、ここ中峰からは鬼ヶ城の北側斜面が、巨大な平面を持った複数の岩で構成されている事がわかる。それぞれの巨石は山の稜線に沿う形で階段状に配置されている。

小野茂氏をはじめ参加者の多くが、「あれも鏡岩だ」と指摘していた。その『鏡岩』の密集地帯から少し離れた左下。鬼ヶ城の中腹に空いた岩窟『神明大権現』の赤い鳥居がかすかに見える。光り輝くべき『鏡岩』と同じ北側斜面に神『明』大権現があるのは偶然だとは思うが出来すぎだと思う。

中峰は開龍寺の上部に当たり、せり出した巨岩『ハト岩』が山の下からもよく見えていた。ハト岩もそうだが、この辺りの岩はやや赤い。

ハト岩の名の由来は、おそらくまた金鶏伝説にちなむものだろうと思っていたが、意外にも「波止岩」である、との事。ここ白石島の漁港は今でこそ小さな入り江に過ぎないが、その漁港の奥に広がる白石島の平野部は、そのほとんどがかつて海であったと言う。或いは島の中枢奥深くにまで入り込む、海の荒波を止める守り神であったのかもしれない。

港へ

その後更に西ノ浦の山中周りで、十～二十件ほどイワクラを見つつ港に向かう。島の南半分は今回のツアーでは回っていないため、これでもまだ全てではない。そのそれぞれが非常に個性的なものであり、一つ一つに何らかの発見がある。極端な話、どのイワクラが単独で存在したとしても、短い論文ならば書けそうな風格がある。

海から引き上げられた『恵比寿神社御神体』が、白石島で最後に見たイワクラとなった。

写真：恵比寿神社

本土へ

名残惜しいが帰りの船に乗る。皆、やはり疲労が見える。私自身もよほど席に座ろうかと思ったのだが、実に良い笑顔で鈴木光雄氏が甲板に立っておられるのを見て、自分も最後に潮風を感じながら白石島に別れを告げようと考え直す。松永君も外に出てきた。三人で船の最後尾に立つ。

出航は十六時二分。白石島から笠岡までの直行便だ。ふと桟橋を見ると、二日にわたり我々を案内して下さった白石島の天野さんが、それこそ見えなくなるまでずっと大きく手を振って下さっていた。こちらも負けじと手を振り返す。白石島の天野さんが見えなくなるまで見送って下さったので、今度は白石島が見えなくなるまでこちらがその姿を見届ける。

直行便は港を出て、進路を曲げずにひたすらまっすぐに進む。鬼ヶ城、なべかろう、王玉岩。二日の間、視界のどこかに必ず存在した、白石島を代表するイワクラ群が去り行く私達の船を、静かにいつまでも見送っていた。十分ほど無言で三人、イワクラ群を見つめる。

船で行くイワクラの旅というのはいいものかもしれない。久々に、別れが寂しいと感じた。

十六時二十四分、笠岡港に到着。挨拶の後解散。二日間、非常に有意義でかつ、非常に楽しいツアーであった。

本ツアーにおいて、高島の薮田さん、白石島の天野さんには本当にお世話になりました。また当日快く交流しあい、協力してくださったツアー参加の皆様。すべての人に心からのお礼を述べたいと思います。

本当に、ありがとうございました。楽しかったです。

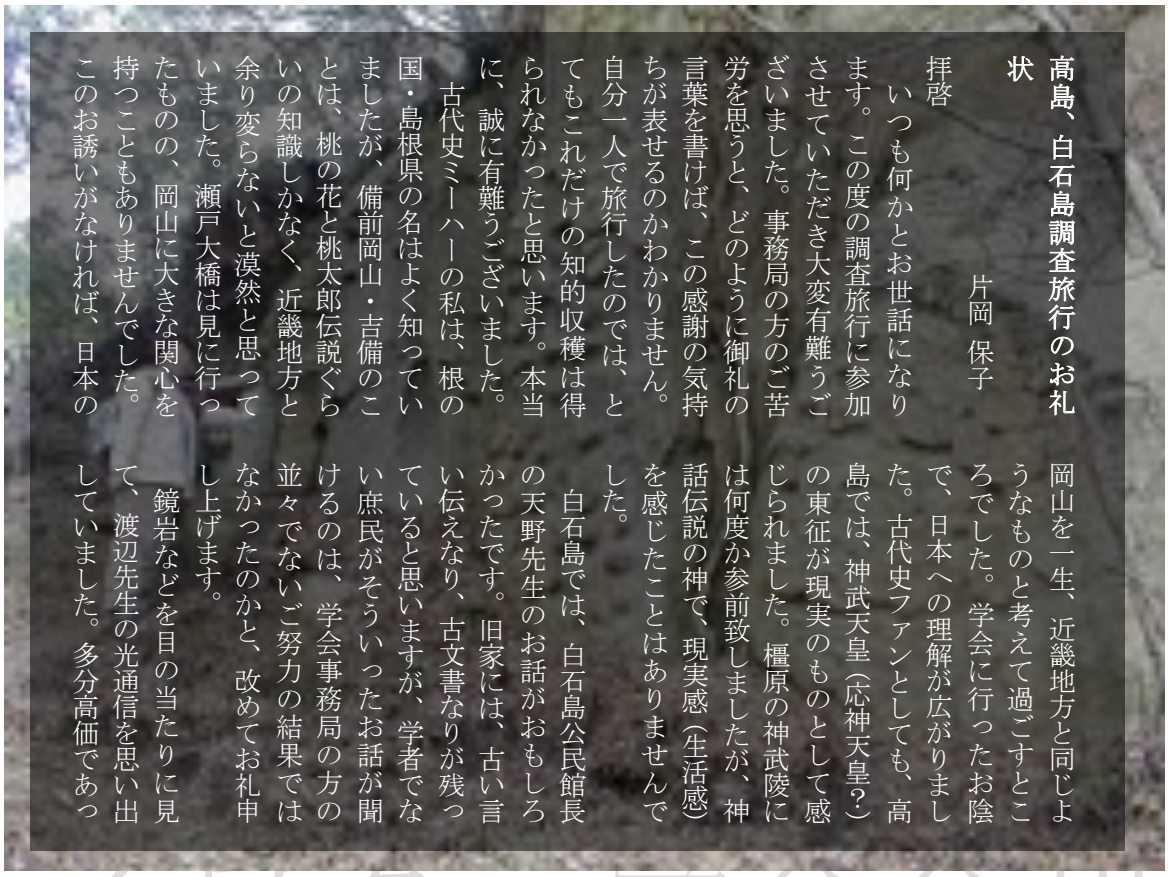
イワクラ学会会報

小田郡白石島名勝遺跡帳」

写真：白石島港にて

【参考文献】
坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋　校注「日本書紀」岩波書店日本古典文学大系
白石島古史研究会　編「岡山県

イワクラ学会会報



高島、白石島調査旅行のお礼状

片岡　保子

拝啓

いつも何かとお世話になります。この度の調査旅行に参加させていただき大変有難うございました。事務局の方のご苦労を思うと、どのように御礼の言葉を書けば、この感謝の気持ちが表せるのかわかりません。自分一人で旅行したのでは、とてもこれだけの知的収穫は得られなかったと思います。本当に、誠に有難うございました。

古代史ミーハーの私は、根の国・島根県の名はよく知っていましたが、備前岡山・吉備のことは、桃の花と桃太郎伝説ぐらいの知識しかなく、近畿地方と余り変らないと漠然と思っていました。瀬戸大橋は見に行ったものの、岡山に大きな関心を持つこともありませんでした。このお誘いがなければ、日本の岡山を一生、近畿地方と同じようなものと考えて過ごすところでした。学会に行ったお陰で、日本への理解が広がりました。古代史ファンとしても、高島では、神武天皇（応神天皇？）の東征が現実のものとして感じられました。橿原の神武陵には何度か参前致しましたが、神話伝説の神で、現実感（生活感）を感じたことはありませんでした。

白石島では、白石島公民館長の天野先生のお話がおもしろかったです。旧家には、古い言い伝えなり、古文書なりが残っていると思いますが、学者でない庶民がそういったお話が聞けるのは、学会事務局の方の並々でないご努力の結果ではなかったのかと、改めてお礼申し上げます。

鏡岩などを目の当たりに見て、渡辺先生の光通信を思い出していました。多分高価であっただろう水銀をこの岩一杯に塗ったのでしょうか、水銀はあの色のまま、どこかから産出したのでしょうか。古代には朱（シュ）は、辰砂（硫化水銀）を土器の中で擂りこぎ状の石（石杵）で磨り潰し頭蓋骨を紅く染めたりしていたようですが。水銀の色、朱の色は、エジプトの金色と同じ憧れの対象だったのでしょうか。

また、白石島では、余りに多くのイワクラかそれらしきものを見ました。岩石の島とはいえ、多すぎるのではないかと思いましたが、石器時代は旧石器時代から数えると５０万年以上続いたわけですから、１００年に１遺跡を造ったとしても数千あっても不思議ではないことになると後に計算しました。古代には、岩山（いわやま）持ちが、歴史時代の大地主のようなものだったのでしょうか。それとも私の子供のころの歴史の教科書のように、縄文時代以前は所有権というような概念のない平等で平和な世の中（今日ではそうではなかっただろうと考えられている。）だったのでしょうか。何万年もの歴史を現実のものとして感じることのできた旅になりました。

その後、私たち夫婦は真鍋島に渡りました。単に日程上行けそうな島で、白石島より遠いというだけの選択でした。

この島は、かつては神武東征軍の１将軍が病気のために残留し、神武軍に魚を届けていたので真魚部（まなべ）と呼ばれていたそうです。その後、神功皇后の皇子の１人がこの島の主になったとか？奈良朝になって、各地の地名を漢字の２文字にして登記するようにとの命令があって、真鍋としたらしいのです。島の低い方の山頂に真鍋さん一族の碑があって、そこに書かれていました。平成４年にある真

鍋さんが呼びかけて、一族が集合し碑を建てたらしいのです。勿論石に日本語で刻んだ碑です。この島にも、西国８８ヶ所巡りがあり、島を1周する道路に沿って石仏が数多くありました。

あくる日の午前中に笠岡に帰り、私は鷲羽山(わしゅうざん、下津井にある標高１３３メートルの山)に登りました。ここにも古墳群がありました。何より大きい岩が剥き出しでごろごろしているのでびっくりしました。しかも、風化が進んでいるように見える岩石群です。風化岩石山と名づけそうな山です。ところがこれは風化だけが原因ではなく大昔鷲羽山が海底に沈んでいた時代に、海水中の塩分などの影響を受け鉄分の多い長石や雲母が変質したために風化と同じようなかたちになっているそうです。

ここは研究が進んでいるようで鷲羽山ビジターセンターに山の成り立ちが解説され、２万年前の旧石器時代人が使ったサヌカイト（香川県国分台産）などが展示されています。瀬戸内海がまだ陸地だった３０万年から１万６千年前ごろまで生息していたナウマン象の化石なども展示されています。山頂からの３６０度の展望はすばらしく、瀬戸大橋の橋のたもとも目の前です。遊園地や温泉のある鷲羽山のホテルに泊って、２８日は海岸線を倉敷に向かって車で走りました。

途中に王子（おおじ）が岳という岩山がありました。まるでイワクラの巣といっていいように見えました。時間がないので、海岸の道路から見上げただけでした。海岸沿いの山側はところどころ崩壊し、工事中のところが数ヶ所ありました。風化状の大岩が多そうでした。

玉野市に入ると岩をご神体にした神社がありましたが、駐車場がすぐにはわからなかったのと気が急くのでパスしました。名前だけでも覚えておこうとしましたが、もう忘れました。

ついでに吉備津神社と鬼城山（きのじょう)にもよりました。鬼城山は、大和朝廷軍の大将吉備津彦命(きびつひこのみこと)を迎え撃った温羅（うら）と呼ばれた人の山城の跡です。朝廷軍の弓矢に対して投石で対抗したとか。ここも岩石のごろごろした小高い山でした。焼けたような跡のある石があって悲しかったです。イワクラかと思えるものもいくらかありました。遺跡のイワクラと自然の岩との見分けは本当に難しいと思いました。岡山は岩山が多いと思いました。

その後、夫の運転で深夜に家に帰りました。車中で、屹立した大岩はイワクラかと考え、襟裳岬、足摺岬、串本の大岩群を思い出していました。山口県も岩山が多かった。高い山になればなるほど岩がちだし、城崎(きのさき）の玄武洞の岩は芸術作品にも等しい、たぶん自然の岩だし、などと考えていました。

白石島では、かなりハードな山登りであったにもかかわらず、運動不足の私でさえ、帰宅後まったく疲れを感じていません。空気がきれいだったからだと思います。また本物の魚料理がいっぱい食べられたことも良かったのかもしれません。イワクラ学会がいい人ばかりの気楽な集まりで、リラックスできたからかもしれません。蛇足かもしれませんが、最後に鷲羽山ビジターセンターにあった瀬戸内海の地質についての説明を書いておきたいと思います。敬具

２００５年3月5日

追記

瀬戸内海の説明（鷲羽山ビジターセンターの展示及びパンフレットより)古代の終わり頃(2.5億年前）海底に泥や砂が堆積しました。それらは粘板岩や砂岩になり、隆起して陸地となりました。中生代の終わり頃（約1億年前）に流紋岩の火山活動によって、陸地は火山灰や火山礫に覆われました。この火山活動に引き続いて地下には、花崗

イワクラ学会会報

岩質マグマが上昇してきて古い岩石はマグマの熱によってホルンフェルス化（変成岩の1種）しました。花崗岩なども地盤の隆起によって陸上に姿を表し始めました。今から1万年から2万年前頃から、それまで北半球の高緯度地域を覆っていた大陸氷河が姿を消すと海面が上昇し、低い地帯に海水が浸入しはじめ瀬戸内海が形成されました。したがって、瀬戸内海は沖積層の上に、広島型花崗岩または、領家型花崗岩が乗っている状態です。そして本文中にあるような海底での海水による化学的風化を受けたものと考えられています。

先日はありがとうございました。

松永 磨怜子

磐座ツアーでは大変お世話になりまして、ありがとうございました。ツアーの準備も当日のお世話もほんとうにたくさんの努力をしてくださったことと感謝しております。

残念ながら高いところへは行けませんでしたが、島の巨石エネルギーは充分に感じることができ、また同じことに関心をもつ方々と出会って、楽しい時間を共有できたことが何よりの幸せと思っております。

単独行動で皆様にご迷惑をおかけしましたことをお詫びいたします。

息子にとりましても、得がたい素晴しい体験をさせていただきましたことを感謝しております。

これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

高島・白石島ツアーに参加して

飯田 勉

高島に船で着いたとき、身体に対する波動(気)が今までと全然異なっている。良いイヤシロ地である。高島を見て、感じて、思ったことは、最高の場は天津磐境であった。天と地をつなぐ場所で、東西南北の磐座を見渡すことで当時の中心地であったと思われる。すばらしい展望であり、島全体が海(河)に囲まれて夢の中にいるような天津磐座(境)である。おきよ資料館にあった土器がどの辺から出てきたか知ることで、高島の磐座の深さを説くことができると思った。

西の磐座に位置する子妊石の大きさに驚き、その周りの石にも気を感じ、どのような儀式があったか知りたいものだ。孫姫石、達磨石、亀石などの名に納得する。王久山に位置する萬古石、どんび石は陰陽の関係であの位置に存在することが拝観石に登った時そう思った。その近くの踊り石と名がついている土台の作り方、そして亀石に似ている事と、上の平らな場所で何の催事をしたのかわからないが、パワーのある所だ。

おきよ資料館の後方にある北の磐座はいい場所ではなかった。もっと学びたい、知りたい、東、南の磐座のことに惹かれつつ白石島に向った。

白石島に着くなり見える景色は岩の島であるがごとく、空海が来た島及び磐座の宝島に乾杯だ！

港から見えた御国岩の大きさと形に興味を抱く。昔も、今も、白石島の港、海を見続けている御国岩の福寿に驚きをかくせない気を感じた。

風が吹き、粉雪がちらつき、時々日が木々の間から差し込み昔の面影をしのばせる御国岩の石と石であった。

白石島の散策が続く、四国八十八ヶ所のように石仏があり、島全体仏の世界に入っているようである。中で第八十三番石仏のところの岩は何かに似ている。私はゴジラの顔であると感じた。

夕日が西に沈むころ、石仏のある岩を見ていると善と悪、エゴとエバ、笑いと悲しみなどの意識が生まれてくる。

イワクラ学会会報

景色と海の幸に満足した宿泊地を離れ、空海が修行をしたといわれている開龍時に向いながら、空を仰ぐところの下には緑の樹々の間から岩が見える。何と美しい絵であろう。

開龍寺の横にある岩、本堂の後ろにある岩が何かを語りかけてくる。「もっと、もっと、明るく、笑おう、笑おう」岩が持っている波動だ。魂だ。

本堂、力石、不動岩、真名井を見てまわっていると，前のほうで大きな声がするので行ってみると、磐鏡が見つかったということに感動した。石の面を作った技術とそこに置いた所の意味にすばらしさ、夢を感じた。

ここからピラミッドの山に登って行く所に神明大権現があり、その上に大岩があり、人が入るだけのすき間に昔の人々の祈りの影を見る。登っていく前は磐と空、その途中鎧岩があり、何故こういうものが出来たのか、高い面で技術によって作られたのか、いろいろ推測しながら登っていく。その頂はエネルギースポットである。ピラミッドを構成している石はいろんな形をしており、何かの動物に似ている。

頂から三六〇度にカメラのシャッターを切りながら、展望のすばらしさを堪能した。そのとき、西の斜面に鏡岩があるなァと感じた。

手袋をしながら昼食をとり、空、海。遠い山々、緑、岩そして煙が流れている町を眺めながら、今から行くなべかろう、大玉岩から開龍寺の後方の展望台につながる歩道がいい地図を描いている。

名がついていない石積みを見ながら広々とした島の岩原のすごさに感激だ。形の面白さ、表情に惹かれながら、鎮壊石にたちよったのち大玉石の方向に歩く。ピラミッドの西にある鏡石のことを気にしながらシャッターを順番に何枚も切り、景色を楽しみ、わくわくしながら小道を辿っていると前方に大玉岩が見えた。誰かが大玉岩に登っている。

イワクラ学会会報

写真：中峰から見た鬼ヶ城

その時、なべかろうのことはわすれていた。「しまった」と思った。大玉岩は、昔生きていた怪獣のような形をしているなあと感じた。

ちょっと突き出た首、かわいい目、すまして匂いをかいでいるような鼻、なんともその表情がユーモラスを感じる。港から見る岩と違って、近くで見る岩にのどかさ、面白さ、ゆったりさを感じた。

開龍寺後方の展望台で三六〇度のパノラマを楽しみながらだんだん下っていくとは石があり、その大きさにびっくり、やはり昔の人々は偉大な人であったことが証明できる。下っていく左手に丸い石を積んだ所と四角の石を積んだところが見えてこれは何をするところかなあと思いながら下っていく。村落の道で一休止。そして、海岸線に下る道で面白い岩があるということで行くと文字のようなものを彫ったと思われる石があり、昔の人が我々に伝えたいというメッセージであると思った。

十字架の岩があったり、まだまだ調査の必要な磐座があったりして、海岸線に出た。

きれいな海を見ながら港に急いだ。

感動と自然美に接し、学んだ二日間であった。

うれしい、楽しい、幸せなときを過ごせたことは宇宙、地球、そしてイワクラ学会の皆さんに「ありがとう、ありがとう、ありがとう」

ここで最後に一番感じたことは、高島、白石島と富士山を結ぶラインと高島、白石島と白山(立山)を結ぶ角度が約三十度になると思う。

昔から、富士山と剣山、富士山と白山、白山と剣山は霊ラインで結ばれている。そのため，高島、白石島から見る方向は、北東に向いている所の先に白山が存在する。

または、元伊勢(内宮)の大江町にも向いている。また、太陽ラインの西の延長上に白石島が存在するような気がする。

おおらかな磐座群に感激

土手塚 史郎

生き方の問題として縄文文化に関心を抱きだした私がイワクラ（磐座）に辿りつくまでにそんなに時間はかかりませんでしたが、いかんせん磐座と呼ばれる石組構造物もしくは自然石が、私の住む越前大野の近辺に数が少ない（発見されていないと言えますが）のです。したがって旅や仕事の道すがら、道沿いの古くからあると思われる神社や聖所と呼ばれるところを尋ね、その『場』の気配を楽しみ、周辺に磐座らしきものがないだろうかとキョロキョロするのが、昨今の私のささやかな喜びでありました。

今回の、白石島、高島ツアーはそんな昨今の私の楽しみの延長線上にありましたし、イワクラ学会創立大会翌日の三輪山磐座群の見学会に参加できなかった一抹の悔しさも手伝って、即参加申込をさせて頂きました。

両島を案内頂いて驚いた事は、あまりにもあっけらかんと磐座もしくは磐座と思われる磐岩が散在していたことにつきます。森深く鎮座する小振りの磐座しかお目にかかってなかったものですから、あのおおらかな磐座の数々と配置には驚きました。イースター島の地は踏んでいませんが、かのモアイに通じる何かがあるような気がしました。海の道を往来する事に秀でた人々のなせる仕事だったのでしょうか。島民宅に３０００年前のイランの剣が伝えられてきたことが何の不思議とも思わない気配を有するこの島々と磐座群の、今後の調査・研究が楽しみですね。

今、このつたない感想文らしきものをしたためている傍に私の住まう越前大野市の地図が数

イワクラ学会会報

枚置かれています。この春分の日に篠座神社という古社の直上と飯降山という古くからの信仰の山の頂との直線上に太陽が没するという話を思い出したからです。郷土史家がかつて発表され、長い間気にはなっていましたが実際この目で確かめようとはしませんでした。イワクラ学会に参加したことや、白石島・高島ツアーが私の重い腰を立ち上げてくれたようです。深く広い視点で、磐座を切り口に郷土の歴史も探って行きたいと思う昨今です。

高島・白石島ツアーでは事務局として重責を果たされた柳原さんや高橋さん。またワクワクする切り口で古代史やイワクラについて語ってくれた渡辺会長や鈴木副会長。忙しい時間を私達の為にさき案内いただいた薮田さん、天野さんに深く感謝いたします。

新鮮で楽しい旅であり、素敵な出会いの旅でもありました。

その他多くの参加者から高島の薮田さん、白石島の天野さんらに対する感謝の声が寄せられました。

高島の薮田徳蔵さんからツアー参加者へのお礼の言葉と、ツアーの後日に発掘された新しいイワクラの写真を頂きました。

ツアー当日、おきよ館の下方で渡辺会長と薮田さんの間で、「あの岩が気になる」「私は亀だと思います」「亀だとすれば、それは高島独特の亀だろう」といった会話があったそうですが、その岩を後日、薮田さんら現地のチームが掘り起こした所、まさしく巨大な亀が姿を現したとの事。目、顔、首にあたる部分に人為的な加工が見られ、今にも十五メートル下の海に飛び込むかのように躍動感に満ちているそうです。

イワクラ学会の二年目を、飛躍の年とする象徴のような新しいイワクラの発見とその報告をもって今回の特集を終わろうと思います。皆様本当にお疲れ様でした。

写真：親子亀石

写真：海を窺う亀石